Kazuto Takamura

クロスカントリースキー（視覚障害）

高村和人

profile

高村和人（たかむら・かずと）
1982年7月29日生まれ
秋田県田沢湖町（現仙北市）出身。
165cm・55kg
田沢湖町立生保内中学校、
岩手県立盲学校（現岩手県立視覚支援学校）
普通科・理療科卒業。
5年間の病院等勤務を経て、
2009年から岩手県立視覚支援学校教諭。

■主な成績
2013年 ジャパンパラリンピック 優勝
2015年 全日本障害者クロスカントリースキー競技大会 3位
　　　　ジャパンパラリンピック 優勝
　　　　IPCワールドカップ旭川大会 3位
2016年 全日本障害者クロスカントリースキー競技大会 3位
　　　　ジャパンパラリンピック 優勝
　　　　IPCアジア選手権韓国大会 クラシカル、フリー 優勝
2017年 IPC世界選手権ドイツ大会 出場
2018年 平昌冬季パラリンピック 出場
　　　　（バイアスロンと合わせて4種目出場）

藤田佑平ガイドと二人三脚で臨んだ2018平昌冬季パラリンピックでは、メダルこそ逃したが会心のレースを見せた。（平昌アルペンシア・バイアスロンセンター）

異色の二刀流パラリンピアン

視覚支援学校教諭の顔を持ちながら、2018年平昌冬季パラリンピックに出場を果たした高村和人さんは、スポーツ界で異色の存在だ。平昌までの道のり、それから3年を経た現在、そして2022北京冬季パラリンピックへの思いを聞いた。

取材・文●盛岡広域スポーツコミッション

恩師の勧めがあって29歳で競技を始め、最初のシーズンにいきなり全日本の大会に出場するが惨敗。負けず嫌いの高村さんは、家族の助けを借りながらオフシーズンに徹底的に持久力を鍛え、翌年のジャパンパラリンピックで見事に優勝を果たす。それでも遅咲きの高村さんが日本代表の強化指定選手に選ばれるのは、さらに2年後のことだった。

「（選ばれるまでは、）若いというだけで自分よりも力のない選手が代表ユニフォームを着ているのが悔しくてしょうがなかったですね」

日本代表の強化指定選手となり、練習環境は一変する。視覚障害者のスキーではガイドの存在が不可欠だが、ハイレベルな強化合宿に参加できるようになったことに加え、代表チームに所属する優秀なガイドとの出会いで、成績は飛躍的に向上した。

2016年に韓国で開催されたIPCアジア選手権で2冠を達成、アジアのブラインドクラスのエース格に駆け上がる。その後、海外のレースで経験を積み、2018年の平昌パラリンピック出場権を獲得、クロスカントリー、バイアスロン合わせて4種目出場を果たす。

「表彰台に上がることはできなかったけれど、実力はすべて出し切った納得のレースでした。家族も平昌に駆けつけてくれて、幼稚園の息子の『お父さん、頑張れ』という声援を聞いた時には、『頑張ってきて良かった』と心から思いましたね」

高村さんの視力は0・01以下で、人が目の前に近づいてきてやっと何か黒い影を感じる程度しかない。父親の影響で野球にのめり込んでいた高村少年が、身体の異変に気が付いたのは小学校5年のときだった。

「セカンドを守っていた時、自分に飛んできたボールが突然視界から消えちゃったんです」

病院の診断結果は「網膜色素変性症」。徐々に視力を失っていく不治の病の宣告は、運動神経に優れ、プロ野球選手を夢見ていた高村少年にとっては計り知れない衝撃だった。夢を失いながらも岩手県立盲学校に学び、視覚支援学校教師になって3年目の2011年に転機が訪れる。高村さんの運動神経を見抜いた恩師から競技スキーの誘いを受けたのだ。

「〝できた〟ことが〝できなくなる〟ことを受け入れられずに、長くスポーツから距離を置いてきた自分の気持ちが少しずつ変化し始めた頃でした。教師として、また視覚に障害がある当事者として、得意なスポーツを通じて視覚障害者の社会参加に貢献できることがあるのではないかと考え、パラリンピック種目でもある競技スキーにチャレンジする決心をしました」

あらゆる競技スポーツでプロ化が進む中、視覚支援学校教師との二刀流でパラリンピック出場を果たすのは並大抵のことではない。高村さんはコロナ禍の影響でこの2シーズンはまったく大会に出場できず、現在は強化指定選手から外れている。北京パラリンピックに出場するためには、まず12月の全日本の大会で好成績を挙げて海外遠征メンバーに入り、日本人上位の成績を残すしかないが、強化練習に参加できず、ガイドも自力で探さなければならない今の環境は極めて厳しい。

「（北京パラリンピック出場は）かなり難しいですがもちろん諦めていません。パラリンピックにはその場でしか味わえない雰囲気があります。何よりも一歩一歩の積み重ねでしか到達できない特別な場所。その過程で得た経験をたくさんの人に伝えていくことが僕の使命だと思っています」

パラ・スポーツには社会を動かす大きな力がある。高村さんはそれを信じて、歩みを止めることなく日々挑戦を続けている。

教壇に立つ高村さんの語り口はとても穏やかだが、生徒たちの自立を願う熱い思いがひしひしと伝わってくる。